

F/T13
FESTIVAL/TOKYO

ARTS
COUNCIL
TOKYO



東京文化発信
プロジェクト



TOKYO ● 2020

東京ヘテロトピア / Port B

構成・演出：高山 明

Tokyo Heterotopia / Port B

Concept, Direction: Akira Takayama

11.9 (Sat) - 12.8 (Sun)

都内各所

Various places around Tokyo



対談：高山 明（構成・演出）× 管 啓次郎（テキスト監修）

『東京ヘテロトピア』への旅

——ズレの翻訳論、過去から帰ってくる現在——

アジアからの留学生たちの痕跡をたどるツアーを通じ、観客を現実の中の異郷＝ヘテロトピアへと導く本作。

その創作を貫く思想は「翻訳」にあった。

高山明とテキスト監修を務めた翻訳者・詩人の管啓次郎の対話から浮かび上がる、東京の現在、未来への眼差し。

高山 管さんとは、「一般社団法人Port観光リサーチセンター」の設立シンポジウム（*1）のための調査で十和田を訪れた時に初めてお会いしました。リサーチといっても車を1台用意されて「勝手にどうぞ」というものだったので、同じ芸術祭に参加されていた管さんと十和田湖や奥入瀬渓谷のあたりをひたすらドライブしたんです。その時に詩集『時制論』のことはじめ、いろんなお話を伺って「今度のプロジェクトではこの人についていこう」と決めました。

『東京ヘテロトピア』は「東京の中のアジアを旅する」プロジェクトなのですが、管さんには作家の選定も含めたテキスト監修をお願いしています。管さんは翻訳者で、詩人で、旅についての文章も書いていらっしゃいますが、それはいわゆる記録文学、旅の文学とは異なるものだと思っています。そこでまずお聞きしたいのは、他言語を翻訳する管さんと、他の土地を訪れ、いわば住民の身ぶりを模倣しながら文章を書く管さん——というのは僕の観察なのですが——の間にはどのような関係が結ばれているのかということです。

管 僕は「文学」というものは、言葉のズレを問題にしているものだと思います。ズレは複数の言語の間だけでなく、同一の言語の中でも起こります。ですから「文学」の問題はすなわち「翻訳」の問題でもあります。僕は20代半ばから翻訳を始めまし

たが、当時は「文学の翻訳をしたい」といっても、なかなかチャンスがなく、頼まれるがまま哲学や人類学、生物学といった、いろんなジャンルの仕事をしていました。でもそのことこそ、僕にとってはまさに「文学」だったんですね。ジャンルごとのズレ、たとえば哲学なら哲学の文体、生物学なら生物学の文体……独自の想像力が独自の言葉になったがゆえに生まれてしまうズレを繋ぎ合わせるところに「文学」はあるのではないかと。またそれは別々の言語の間だけでなく、同じ言語を使う人間の間でも起こっていることだし、さらにいうなら、ある一人の人間が持っているイメージが言葉と結びつく時にも起こっていることかもしれない。つまり、犬や猫のような具体的な対象物だけでなく、「これが悲しいということか」なんて、感情が言語のルールとして考えられる時にも「翻訳」は起きている。そんなことをもやもやと考えながら、翻訳の仕事が続けられました。

旅行というのもまた「翻訳」の体験だと思えます。数学用語としての“translation”には「平行移動」という意味がありますし、神学的な言い方では、たとえばマリアさまが「昇天」したことを表します。つまりこの言葉には水平移動と、垂直移動の両方の意味が含まれているわけです。何かを移動させていくと同時に、何かを昇天させる。それは旅の途中で出会うもの、食べ物でも、風景でも、他人でもいいのですが、突然やってきたそれを受け入

られるか、同化できるのかできないのかということにもつながります。僕は大学を卒業してすぐの1年間、ブラジルを中心に南米を巡ったことがあります。当時のブラジルは結構危ないところでしたから、常に安全確保のための配慮をしておかなくてはならない。そうすると、「ものを盗られないように、襲われないように」といった意識を糸口に、どうしてもそれまでの自分の生活や日本社会のあり方を反省せざるを得なくなってしまいます。旅の効用はそうして人にものを考えさせることです。そして違和感を感じたとき、それを乗り越える唯一の方法は、その対象を言語で描写することです。僕が書くものは、旅行記ではなく、むしろ反＝旅行記なのだと思います。自己と対象がいずれも崩れていくところを書こうとしている。もちろん、言葉の本質は固定にありますから、描写といってもそれは実際に文書を書くことだけに留まるものではない。「思う」ことを含めたあらゆる言語的記述を通して、私たちはある部分では自己を肯定しつつ、別の面では今までの自己を消してしまうという「書き消し」の作業を、旅において行っている。これもまた、一つの移動であり、ある一つの生の段階から次の生へと移行する「翻訳」の体験なのではないかなと思います。

高山 僕が演劇を考える際に「翻訳」というキーワードを使っているのも、今のお話と関係するかもしれません。というのも、僕はベンヤミン、ヘルダーリンという二人の翻訳者を經由してブレヒトの演劇に出会ったと思っているんです。何か異質なものと接する時に、自分の言語、自分のジャンルに引き寄せていくのが一般的な翻訳理論だとすると、彼らは逆に、同化できない部分を残しておくのが翻訳の役割で、その部分こそが言語の可能性を拡張していくはずだという。このことは、役と俳優、舞台と観客といった、演劇をめぐるさまざまな関係にも当てはまります。ですから僕自身が一貫して目指しているのも、何か別のジャンルのものを演劇に同化させるとか、他の言語を自分の言語に引き寄

せるのではない方法で、異物といかに折り合いをつけられるかということなんです。

さきほど「管さんについていこうと決めた」と言いましたが、実は最近、僕のやってきたことはどれも「牛に引かれて善光寺参り」という言葉に集約されるのではないかなと思っています。逃げる牛を迷惑に感じながらも追いかけていくと、善光寺という改心の場にたどり着いた。それと同じようにまずは受身になって、無理に行く先をデザインしたりはせず、牛についていった方がいい結果がもたらされる。「同化」というのは生物が生きて行くのに必要な機能でもあるから、自然にやっていたら本能的に必ずそうになってしまう。だから、そうならない戦略としての「牛に引かれて善光寺」、この感覚は大事にしたいと思っています。そこから異境との出会い、新しい可能性が出てくるはずだ、というのが今のお話をうかがってますます強く感じたことです。

「近代」に隠されたもの

管 エドゥアール・グリッサンというカリブ海のフランス語圏の作家、詩人、思想家にずっと興味を持っているんですが、彼の基本的な考えは「不透明性」にあるんです。彼はカリブ海におけるアフリカ系の人々の歴史に触れながら、透明なコミュニケーションは権力関係でしかなく、互いに不透明なものを残しつつ、共生していこうとする意志の方がはるかに重要だと言います。なぜここでカリブ海が出てくるかというと、われわれが今生きているグローバル社会の基本構造は、そこから始まったといえるからです。400年前、ヨーロッパ人はカリブ海の島々の原住民を殺し尽くしたうえで、アフリカから黒人奴隷を連れてきて、サトウキビという世界的な商品作物の栽培をさせました。その時にできあがったのが、アフリカから労働力を連れてきて作ったものをヨーロッパに持っていき、アフリカにはヨーロッパの物資、特に銃などを売りつけていったという構図です。今でもアフリカの内戦の背後にはヨーロッ

バの武器商人がいます。またサトウキビ生産は農業の工業化のプロトタイプになった。つまりここで、広大な地域を均質化し支配する力としてのヨーロッパができてしまったんです。そして、その力こそが、われわれが「近代」と呼ぶ時代を呼び寄せ、現在に至る影響を与えている。今、キリスト教世界とイスラム過激派の戦いのように捉えられていることも、実際は、昔ながらの利権争いに、ヨーロッパ勢力の利権と支援が絡み、対立がモザイク化していつているというのが実情に近いんだと思います。

高山 アジアに関しても、それと同じような状況はありますね。僕はここ数年、いくつかのプロジェクトを通してアジアに触れるなかで（*2）、日本の近代化を欧米化として考えるだけでなく、アジアというフィルターを通して見ても見ていく必要があると思うようになりました。今回のツアーの訪問地には都内のアジア料理レストランが入っています。グルメツアーみたいな軽い感じに見えるかもしれませんが、嗜好というものがどうつくられてきたのか、見ようによっては、管さんが『ホノルル・ブラジル』でも触れられていた「獲得された嗜好」の実践の場として、アジアレストランを「利用」できると思うんです。「東京の中のアジア」は僕らがいつでもいける

場所なのに、そこにアクセスするための回路はほとんど発達していない。東京は地理的には欧米ほどのゾーニングはない都市ですが、目に見えない形での排除や住み分けはむしろ進んでいる、というのがリサーチをしてみた実感です。ですからたとえば「食」をどう受容するかという身近なところから、一歩ずつアジアに近づけないか。「おいしい」とか「おいしくない」とかいうところから、僕らの趣味や嗜好を作りかえられればいいなと思うんですね。そして、その過程にさきほどから議論している「言語」「翻訳」の問題をぶつけてみたいというのが、今回の作品の枠組みなんです。

管 アジアにとっての日本というのは、すごく大きな、考えるべきテーマですよ。たとえば魯迅が日本に留学していた頃にも、中国人留学生は2万人はいたといいます。それがある時期激減して、最近また急増している。もちろん、中国だけでなく、台湾や朝鮮半島からの学生たちもたくさんいました。こうした問題に目を向ける際に、われわれが意識しなければならないのは、やはり日本の植民地支配です。ヨーロッパ以外の地域でヨーロッパ型の植民地拡大に乗り出したのは日本だけで、そのことの意味はとても大きい。

それから、今やどの都市もそうだけれど、東京もまた交易の網目に組み込まれた世界都市だということ。そこにはさまざまなモノが“translate”されてくる。それがモノだけなら分かりやすいんですが、それに対応する言葉がついていくかどうかというと、そんなことはないんですね。マクドナルドのハンバーガーにしても、何かの道具にしても、持っていけばそれがなんであるかは理解されるでしょう。だけれどそれによって引き起こされる異物感や新たな感覚を意識できるだけの言葉は、物の移動だけではついてこない。そうした言葉が存在しない段階のことを、われわれは「隠されている」と知覚するんだと思います。だから高山さんが言った「見えないゾーニング」というのは、「言葉にされてい



『十和田、奥入瀬
水と土地をめぐる旅』
管 啓次郎+十和田奥
入瀬芸術祭 編
(青幻舎)

『時制論
Agend'Ars4』
管 啓次郎 著
(左右社)

ない]ということですね。その隠された要素を訪ねつつ、言葉にする。それが今回の『東京ヘテロトピア』の目標だと僕は理解しています。またそのことと、作家たちの参加を通じて、この作品に僕がやってきたような反=旅行記の記述を持ちこむことは、ほぼ相似形をなすものだと思います。

高山 今回のプロジェクトの体裁は、ツーリズムを思いきり前面に押し出したものになります。でもそれはフェイクかも知れず、グルッと一周して元に戻ってきたらなんだか別のところに出てしまった、というようなものになればいいなと。それは管さんが『時制論』で実験されていたことにも関係するのではないのでしょうか。

管 『時制論』は、ヘテロトピアの詩学でもあると同時に、トポス(空間)ではなくクロノス(時間)の、ヘテロクロニアの詩学でもある。詩集を実際に見てもらおうと分かりますが、そこには地理的にも、時間的にも異質なあらゆる要素が並べられています。またそれは、一行ごとに過去形と現在形が交替しつつ繋がっている。そこがとても重要なんです。人間は外国語を勉強してしまうと、「過去形」だとか「現在形」だとかっていうけれど、実は書かれた言葉というのは、すべて過去形なんです。逆に、声に出される言葉は過去のことを話していても現在形。つまり、その時に意識されているものはすべて現在だし、エモーションはすべて現在形でしかあり得ない。『時制論』はまさにこのことを主題にした作品で、自分が経験したことは常に、現在に帰ってくる可能性があるということを実演しています。

もしこのことを今回のプロジェクトに重ねて、集合体としてのわれわれが、一つの都市を見ているというふうを考えるなら、私たちがどこへ移動し、何とぶつかったとしても、見出されるのはやはり現在なんだと思う。たとえ過去の痕跡がすべてそこに書込まれていたとしても、それは現在なんです。そのことを観客がはっきりと自覚できるようにすれ

ば、「ヘテロトピア」は「ヘテロクロニア」でもあるということも分かってきて、このプロジェクトも非常にいい感じになるんじゃないでしょうか。

また、記憶というのはすべてがフィクションではありますが、経験の場において強い傷を残した出来事ほど、あとになっても甦ってくるものです。ですから今回のプロジェクトでもそれぞれの場所に書き込まれた記憶を、どのくらいの強さで経験できるかということがもっとも大事だと思います。

高山 観客が訪ねていった先でテキストを「聞く」という行為が、決定的に重要になるはず。それこそ、書くことで固定された過去を、聞くことでふたたび現在形にするわけですから。そこでの経験は「再発見」なのかもしれないけれど、聞いた人にとっては初めて生まれた新しいものにほかならない、そんな体験をしてもらえたらいいなと思っています。

管 今回はそのテキストの朗読者に、日本語が母語ではない人を起用しているのもいいですね。言葉というのは平等で、覚えてしまえば誰もが使うことができる。ところが実際に使われるとすぐにわれわれは、訛りだとかを見つけてマイナスの価値を与え差別しようとする。でもね、間違っている、全部が分からなくてもいいんです。そういう、グリッサンの不透明性の原理にも通じる態度の変換も、今回の作業には含まれている。

「同化」を越える言語

高山 プロジェクトに参加して頂いている作家の方たちには、文体の実験もやってもらえたらうれしいです。リサーチの過程では、奇妙な日本語というのはいっぱい収集されていて。そういうものを受容の過程で同化させてしまうのか、そのままキープするのはそれぞれの作家に任せられるわけですが、どこか奇妙だけれどすごく面白い言葉が出てくるといい。

管 人間は1世代のうちにも食べ物の趣味を変え、言葉を変化させることができる。近代以後の日本語が100年かけて現在に至ったというのも、実際には10年単位のみまぐるしい変化の結果だと思います。ただ、食べ物と同じで、言葉に関しても、新しいものを食べたいという気持ちと懐かしいものがいいという気持ちの両方があるわけです。人間は常に、過去と未来の間に引き裂かれながらゆらゆらと折り合いをつけ、変化していくんだと思います。でも、一気にわっと変わってしまう場合もあるんですね。これは言語の話ではないけれど、1930年代にみんなが開戦論に傾き、いざ終戦を迎えたら喜んでアメリカ兵を受け入れ……といったことは実際にあった。で、そんな時に人間の行動を止めるのも「言葉」です。何かの拍子で集団的な行動に走ってしまう時に「止める」「危ない」と伝えて、行動をコントロールできるのは言葉だけだと僕は思っています。これは安部公房の教えでもあるけれど。

高山 ブレヒトが「同化」ではない役と役者の関係について考え、舞台に没入しない観客、客席を意識的に作り始めたのは、ナチスが勃興していく時期と重なります。ナチスは徹底的な同化と排除を押し進めたわけですが、いろんなところにあるズレと

どう折り合いをつけていくか、個人レベル、社会レベルでの受容の方法を探っていこうというのがブレヒトの演劇です。僕はその姿勢を受け継ぎたいと思っています。今回の『東京ヘテロトピア』で扱うのも、ズレている場所ばかり。でもそういったズレをきちんと受け入れられるようになることが、これからの僕ら自身や東京という都市の可能性に繋がっていくのではないのでしょうか。

(取材:ART iT編集部/構成:鈴木理映子)

ART iT「高山 明 (Port B) 連続対話」連載中

http://www.art-it.asia/u/admin_ed_contri14_j/

*1 観光リサーチのための一般社団法人を設立、青森の観光に携わる人たち、写真家の畠山直哉、メディア理論家の桂英史、翻訳者の林立騎らをゲストに言論イベントを開催し、その模様を「作品」として映像化したPort Bの最近作。2013年9月に十和田奥入瀬芸術祭で発表された。

*2 山の手線全29駅に設置された「避難所」(外国人コミュニティを含む)を巡る『完全避難マニュアル 東京版』、横浜・黄金町界隈を舞台に、「異国」との接触の歴史と現在を浮かび上がらせた『赤い靴クロニクル』など。

高山 明 (たかやま・あきら)

1969年生まれ。2002年にPort Bを結成、既存の演劇の枠組みを越えた社会実験的作品を発表。都市や社会に存在する記憶や風景、メディアを引用、再構成する手法で、国内外の演劇祭、美術展で注目を集める。『個室都市 東京』(F/T09秋)はウィーン芸術週間(11年)に、13年にも同芸術祭で「Referendum- 国民投票プロジェクト」(F/T11)、『光のないII』(F/T12)のウィーン版を発表、いずれも高い評価を得た。



© Yasuyuki Emori

管 啓次郎 (すが・けいじろう)

詩人、比較文学者、翻訳者。明治大学大学院理工学研究所新領域創造専攻デジタルコンテンツ系教授、同大学「野生の科学」研究所運営委員。ASLE-Japan文学・環境学会代表。主な著書に「コンプスの犬』『狼が連れだって走る月』、『本は読めないものだから心配するな』、『斜線の旅』(読売文学賞受賞)、『ストレンジグラフィ』、訳書にエドゥアール・グリッサン『〈関係〉の詩学』など。



構成・演出：高山 明

テキスト

監修：管 啓次郎

執筆：小野正嗣、温 又柔、木村友祐、管 啓次郎

リサーチ

一般社団法人Port観光リサーチセンター

監修：林 立騎

リサーチャー：田中沙季、深澤晃平、箭内聖司

リサーチ協力：栗田知宏、高際裕哉、南 映子

ガイドブック

編集：深澤晃平

デザイン：大岡寛典、内田 圭（大岡寛典事務所）

テキスト：林 立騎（一般社団法人Port観光リサーチセンター）

地図製作：深澤晃平

ラジオ・ディレクター：毛原大樹

音源録音・編集：宇賀神雅裕

技術：井上達夫

プロジェクト・アドバイザー：猪股 剛

記録写真：蓮沼昌宏

制作：田中沙季

制作アシスタント：平沢花彩

協力：東京芸術大学・桂英史研究室、柿本ケンサク、高橋 聡、望月章宏

特別協力：アンコールワット、漢陽楼、祥雲寺、新星学寮、

タックイレブン高田馬場ビル、東洋文庫ミュージアム、ノングインレイ、

ヴェジハーブサーガ、ネパール居酒屋モモ

F/Tスタッフ

制作統括：武田知也

制作：戸田史子

プログラム・ディレクター：相馬千秋

ユース・アート・マネジメント・プログラム (YAMP)

伊藤安那、佐藤成行、田中ゆかり、平沢花彩

製作：フェスティバルトーカー、一般社団法人Port B

主催：フェスティバルトーカー

Concept, Direction: Akira Takayama

Text

Supervision: Keijiro Suga

Writers: Masatsugu Ono, Wen Yuju, Yusuke Kimura, Keijiro Suga

Research

Port Tourism Research Center

Supervision: Tatsuki Hayashi

Researchers: Saki Tanaka, Kohei Fukazawa, Seiji Yanai

Research Support: Tomohiro Kurita, Yuya Takagiwa, Eiko Minami

Guide Book

Editing: Kohei Fukazawa

Design: Hironori Oooka, Kei Uchida (OOKA Hironori office)

Text: Tatsuki Hayashi (Port Tourism Research Center)

Map: Kohei Fukazawa

Radio Director: Hiroki Kehara

Audio Recording, Editing: Masahiro Ugajin

Technical Director: Tatsuo Inoue

Project Advisor: Tsuyoshi Inomata

Photography: Masahiro Hasunuma

Production Co-ordination: Saki Tanaka

Assistant Production Co-ordination: Kaaya Hirasawa

In co-operation with Tokyo University of the Arts School of Film and

New Media (Eishi Katsura research unit), Kensaku Kakimoto,

Satoshi Takahashi, Akihiro Mochizuki

Special In co-operation with Angkor Wat, KANYO-RO,

Shoun-ji Temple, Shinsei Gakuryo Domitory, Tuck Eleven Building,

Toyo Bunko Museum, NongInlay, VEGE HERB SAGA,

Nepali Restaurant MoMo

F/T Staff

Production Manager: Tomoya Takeda

Production Co-ordination: Fumiko Toda

Program Director: Chiaki Soma

YAMP (Youth Arts Management Program)

Anna Ito, Sigeyuki Sato,

Yukari Tanaka, Kaaya Hirasawa

Produced by Festival/Tokyo, General Incorporated Association Port B

Presented by Festival/Tokyo

Port B 今後の予定 (2014年)

『国民投票プロジェクト』広島・長崎ツアー

『HAU4』(Hebbel am Ufer / ベルリン)

『完全避難マニュアル フランクフルト版』(Künstlerhaus Mousonturm / フランクフルト)

『国民投票プロジェクト』インスタレーション(バーゼル、チューリヒ)ほか

Port B Schedule (2014)

"Referendum Project" Hiroshima, Nagasaki Tour

"HAU4" (Hebbel am Ufer / Berlin)

"The Complete Manual of Evacuation - Frankfurt" (Künstlerhaus Mousonturm / Frankfurt)

"Referendum Project" Installation (Basel, Zürich), and more

フェスティバル/トキョー組織委員

天児牛大	振付家、演出家
萩田伍	アシゲループホールディングス株式会社 代表取締役会長 兼 CEO
扇田昭彦	演劇評論家
永井多恵子	公益社団法人国際演劇協会 (ITI /UNESCO) 日本センター会長
越川幸雄	演出家
野田秀樹	演出家
野村萬	狂言師
福原義春	株式会社資生堂 名誉会長 (50音順)

フェスティバル/トキョー実行委員会

名誉実行委員長	高野之夫	豊島区長
実行委員長	市村作知雄	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 会長
副委員長	吉末昌弘	豊島区文化工部長
委員	八巻規子	豊島区文化工部文化デザイン課長
	大沼映雄	公益財団法人としま未来文化財団 常務理事 / 事務局長
	岸正人	公益財団法人としま未来文化財団 部長
	蓮池奈緒子	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 理事長
	相馬千秋	NPO法人アートネットワーク・ジャパン プログラム・ディレクター
監事	天貝勝己	豊島区総務部総務課長
法務アドバイザー	福井健策、北澤尚登 (骨董通り法律事務所)	

フェスティバル/トキョー実行委員会事務局

プログラム・ディレクター	相馬千秋
事務局長	蓮池奈緒子
事務局次長	小島寛大
制作統括	武田知也
制作	河合千佳、喜友名織江、小森あや、 相山由香、高橋マミ、戸田史子
公募プログラムコーディネーター	小山ひとみ
メディア戦略・広報	松本花音
メディア戦略・広報アシスタント	北沢聡子、田村かのこ
オープン・プログラム	藤井さゆり
オープン・プログラムアシスタント	田野入涼子、後藤天
票券	長原理江
票券アシスタント	菅原淳、伊楢敏
チケットセンター	佐々木由美子、佐藤久美子
総務	草原円花、一色善好
経理	堀久美子、青木亮子

技術監督

技術監督アシスタント

照明コーディネーター

音響コーディネーター

アートディレクション+デザイン

ウェブサイト

パブリシティ

海外広報・翻訳

物販

編集・執筆

アジール (佐藤直樹+中澤耕平+菊地昌隆)
濱田真一+北島謙子+重松佑 (株式会社ソフトラック)
平昌子、望月章宏
アンドリュース・ウィリアム
渡辺淳
鈴木理映子

主催：フェスティバル/トキョー実行委員会

東京都・豊島区 / アーツカウンシル東京・東京文化発信プロジェクト室・東京芸術劇場 (公益財団法人東京歴史文化財団) / 公益財団法人としま未来文化財団 / NPO法人アートネットワーク・ジャパン
共催：公益社団法人国際演劇協会 (ITI/UNESCO) 日本センター

協賛：アサヒビール株式会社、株式会社資生堂、ブルムバグ エル・ピー

助成：公益財団法人アサヒグループ芸術文化財団

特別協力：西武池袋本店、東武百貨店池袋店、東武鉄道株式会社、株式会社サンシャインシティ、

チャコット株式会社

協力：東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、一般社団法人豊島区観光協会、一般社団法人豊島産業協会、公益社団法人豊島法人会、池袋インバウンド推進協力会、池袋ホテル会

メディアパートナー：ART IT、J-WAVE 81.3 FM、新潮、CINRA.NET、美術手帖

ホテルパートナー：サンシャインシティアパルトメントホテル、ホテルメトロポリタン、ホテル グランドシティ、サクラホテル池袋

地域パートナー：池袋西口商店街連合会、特定非営利活動法人セファール池袋まちづくり

宣伝協力：株式会社ポスターハウス・カンパニー、有限会社ネビュラエクストラサポート (公募プログラム)

会場協力：アサヒ・アートスクエア (公募プログラム)

認定：公益社団法人企業メナ協議会

平成25年度文化庁地域発・文化芸術創造発信インシアブ

[会期] 平成25年11月9日(土)～12月8日(日)

ユース・アート・マネジメント・プログラム (YAMP)：石井菜保子、伊集院明、伊藤安那、伊藤羊子、稲垣美実、乾亜沙美、今井美希、榎村 真、太田 光、緒方彩乃、紙 弘、川又美穂、栗田知宏、奥水すみれ、崔 潤、作田飛鳥、藤原成行、澤田 唯、清水裕花、菅井新菜、田中ゆかり、宮川仁美、塚田佳都、野口 彩、平沢花彩、嵯 朝美、堀久美、三浦彩歌、水野恵美、守山真利恵、山崎 優、山本美幸、吉田崇大、吉田由貴

発行：フェスティバル/トキョー実行委員会 〒170-0001 東京都豊島区西巢鴨4-9-1 にしすがも創造舎 NPO法人アートネットワーク・ジャパン内 TEL:03-5961-5202 <http://festival-tokyo.jp/>
編集：鈴木理映子、フェスティバル/トキョー実行委員会事務局 アートディレクション+デザイン：佐藤直樹+中澤耕平 (ASYL)、小林 剛
※内容は変更になる場合がございます。ご了承ください。 禁無断転載

Festival/Tokyo Organization Committee

Ushio Amagatsu	Choreographer, Director
Hitoshi Ogita	Chairman and Representative Director, Chief Executive Officer, Asahi Group Holdings, Ltd.
Akihiko Senda	Theatre critic
Taeko Nagai	Chairman, Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)
Yukio Ninagawa	Director
Hideki Noda	Director
Man Nomura	Kyogen actor
Yoshiharu Fukuhara	Honorary Chairman, Shiseido Co., Ltd.

Festival/Tokyo Executive Committee

Honorary President of the Executive Committee: Yukio Takano, Mayor of Toshima City
Chairman of the Executive Committee: Sachio Ichimura, Arts Network Japan Director
Vice Chairman of the Executive Committee: Masahiro Yoshizue, Director of Culture, Commerce and Industry Division of Toshima City
Committee Members:
Noriko Yamaki, Culture, Commerce and Industry Division, Director of Cultural Design Section
Hideo Onuma, Director of Secretariat of Toshima Future Culture Foundation
Masato Kishi, Executive Manager of Toshima Future Culture Foundation
Naoko Hasuake, Arts Network Japan Representative
Chiaki Soma, Arts Network Japan Program Director
Supervisor: Katsumi Amagai, General Affairs Director, Director of General Affairs Section of Toshima City
Legal Advisors: Kensaku Fukui, Hisaoki Kitazawa (Kotto Dori Law Office)

Executive Committee Office

Program Director: Chiaki Soma
Administrative Director: Naoko Hasuake
Vice Administrative Director: Hirotomo Kojima
Production Manager: Tomoya Takeda
Production Co-ordinators:
Chika Kawai, Orii Kyuna, Aya Komori, Yuka Sugiyama, Mami Takahashi, Fumiko Toda
Emerging Artists Program Co-ordination: Hitomi Oyama
Media Strategy: Kanon Matsumoto
Media Strategy Assistants: Satoko Kitazawa, Kanako Tamura
Open Program: Sayuri Fuji
Open Program Assistants: Suzuko Tanoiri, Takashi Goto
Ticket Administration: Rie Nagahara
Ticket Administration Assistants: Nagisa Sugahara, Jyonyong Yoon
Ticket Center: Yumiko Sasaki, Kumiko Sato
Administrators: Madoka Ashihara, Hisayoshi Ishshiki
Accounting: Kumiko Tsutsumi, Ryoko Aoki

Technical Director: Eiji Torakawa

Assistant Technical Director: Chizuru Kouno

Lighting Co-ordination: Makiko Sasaki (Factor Co., Ltd.)

Sound Co-ordination: Akira Akawa (Sound Weeds Inc.)

Art Direction + Design: Asy! (Naoki Sato + Kohei Nakazawa + Masataka Kikuchi)

Website: Shihichi Hamada + Satoko Kitajima + Yu Shigematsu (Ioftwork Inc.)

Public Relations: Masako Taira, Akhiro Mochizuki

Overseas Public Relations, Translation: William Andrews

Merchandise: Jun Watanabe

Editor/Writer: Rieko Suzuki

Organized by Festival/Tokyo Executive Committee

Tokyo Metropolitan Government, Toshima City, Arts Council Tokyo & Tokyo Culture Creation Project & Tokyo Metropolitan Theatre (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture), Toshima Future Culture Foundation, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ)

Produced in association with Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)

Sponsored by Asahi Breweries, Ltd., Shiseido Co., Ltd., Bloomberg L.P.

Supported by Asahi Group Arts Foundation

Endorsed by Ministry of Foreign Affairs, GEIDANKYO

Special co-operation from SEIBU (IKEBUKUROHONTEN), TOBU DEPARTMENT STORE (IKEBUKURO,

TOBU RAILWAY CO., Ltd., Sunshine City Corporation, Chacott Co., Ltd.

In co-operation with the Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima, Toshima City Shopping Street Federation, Toshima City Federation, Toshima City Tourism Association, Toshima Industry Association, Toshima Corporation Association, Ikebukuro Inbound Association, Ikebukuro Hotel Association

Media Partners: ART IT, J-WAVE 81.3 FM, SHINCO, CINRA.NET, Bijuus Techo

Hotel Partners: Sunshin City Prince Hotel, Hotel Metropolitan, Hotel Grand City, Sakura Hotel Ikebukuro

Regional Partners: Ikebukuro Nishiguchi Shopping Street Federation, NPO Zephyr

PR Support: Poster Har's Company, Nevula Extra Support Co., Ltd. (for F/T Emerging Artists Program)

Venue Co-operation: Asahi Art Square (F/T Emerging Artists Program)

Approved by Association for Corporate Support of the Arts

Supported by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan in the fiscal 2013